



《 卷 頭 言 》

疑 問 と 期 待

日本農薬株式会社常務取締役 渋谷 正弘

地球はどれだけ多くの人口を養えるのであろうか。世界各国が現在の先進国の生活水準に到達した時、人口はどの位に増加しているだろうか。その時、食糧の確保と環境保全とは、どのような関連をもって、どう調和がとられているのであろうか。

国連の人口局は、1988年に51億2,000万人であった世界の人口が、2000年には62億5,000万人に達し、更に増え続けて2050年過ぎには101億人に達して沈静化に向うと予測している。予測の中では、人口予測が最も当たる確率が高いものといわれているが、21世紀半ばの数字が当たるかどうか私には解らない。

地球環境に関して危惧されている現象として、酸性雨、オゾン層破壊、温暖化、熱帯林破壊、砂漠化、海洋汚染、産業廃棄物、等々さまざまな問題があるが、これらに関してマスコミは正しく報じているのか、短絡的な危機の誇大報道はないのか、その道の専門家でないので良く解らない。農薬の弊害に関しての報道には、正しく報道されていない場合があることは、われわれ関係者は、つとに指摘しているところである。

大きさ流れとしては、住み易い地球環境の維持、保全についての適切な対策が講ぜられねばならないことはいうまでもない。

日本では農薬は斜陽産業化してきたと報ずるマスコミも出てきた。果してそうであろうか。農薬需要の停滞、減農薬農業への潮流、新薬開発費の増大等々、厳しい局面に直面しているこ

とは間違いない。これまで農薬が食糧増産、ひいては人口増加に寄与してきたことは論をまたないところであるが、これから農薬は人類の発展にどのようにかわり合い、どのように貢献していこうとするのか。これからの農薬に求められるものとは問えば、良く効いて、安くて、安全なものと答えが返って来る。食糧生産、作物栽培、緑の保全における農薬の位置づけについての論議が盛んな昨今、農薬の研究開発にたずさわるものにとって、1990年代にどのようなターゲットをかかげ、21世紀に通用する、どのような新農薬を出していくか。まさに正念場を迎えたように思う。農薬は生理活性物質を食糧生産等に如何に上手に利用するかという方途に沿った、より高い性能を備えた新農薬が創出されていくであろう。新農薬の創出には、化学、物理学、生物学、農学、毒物学、医学、工学等巾広い自然科学の掘り下げ、総合化が必須であるが、これらの分野の技術革新をベースにした新農薬の出現こそが未来農薬として望ましい。そして創出された新農薬を、どのように育てていくかとなると、社会科学の分野への踏み込みが、これまで以上に重要になってくる。

新農薬の創出は、数と力だけで事が決まるところには限らないところに、農薬研究開発の面白さがある。真に望まれる農薬とは何か、答えは農業の実態を知ることから出てくるように思う。来世紀は新しい農薬時代の幕明きとなることを期待したい。